
『週刊新刊全点案内』における 新刊書籍の掲載状況

[論文]

木下 朋美, 中園 長新

The Listing Condition of New Publications in the “Weekly Guide of New Japanese Publications” of the TRC

[Article]

Tomomi Kinoshita and Nagayoshi Nakazono

本稿は、株式会社図書館流通センターが発行する『週刊新刊全点案内』(以下『新刊案内』)を題材に、『新刊案内』における日本国内の新刊書籍の掲載状況の網羅性を調査したものである。調査の結果、『新刊案内』における新刊書籍の網羅性は非常に高いものであったが、非掲載理由が明確でない書籍も散見された。図書館はこうした特性を把握した上で、『新刊案内』を選書業務に活用することが求められる。

This paper examines how comprehensively the “Weekly Guide of New Japanese Publications” “Weekly Guide” of the TRC, Inc. covers new publications in Japan. Our survey has revealed that, while the “Weekly Guide” contains most of the new books, it excludes some publications without reasonable reasons. We suggest that public libraries are required to know this fact of the “Weekly Guide” in their book selection.

キーワード: 図書館流通センター, 『週刊新刊全点案内』, 公共図書館, 選書, 網羅性

はじめに

公共図書館の選書や選書論は多くの研究者や図書館関係者により議論されており、近年もこのテーマに関する書籍や論文が発表されている¹⁾。しかし従来の選書論の対象は、図書館内部で完結する狭い意味の選書であり、図書館外部での選定プロセスを踏まえた検討はまだ十分とはいえない。

「選ぶ」行為は、図書館内部のみで行われるものではない。書籍が出版されてから図書館の書架に配架されるまで「何段階もの選定」²⁾が行われる。たとえば書籍が出版される段階では「原稿を書籍にする／しない」の選択があり、「取次が扱う／扱わない」も選択の一つである。さらに、図書館が選書業務を行う際には書評誌、新聞の書評欄、出版社の新刊情報や民間MARC³⁾販売会社の出版情報誌⁴⁾が利用されることが一般的だが、そうした媒体に書籍の情報が掲載される段階でも「書籍情報を掲載する／しない」の選択が行われている。

筆者らは上記の問題意識の下、書籍が出版されてから公共図書館の書架に配架されるまでに通過する出版流通分野、および図書館内での収書・受入・組織化・配架それぞれにおける選定も広い意味での選書であると捉え、それら「何段階もの選定」も含めて公共図書館における選書を検討している。

この研究範囲を射程に収めつつ、筆者らはまず選書のツールとして用いられる出版情報誌に着目し、出版情報誌に書籍がどのように掲載されているか、具体的には出版情報誌に新刊書籍が掲載される際の事前選定の有無を確認するとともに、出版情報誌の意義を明らかにすることを試みている。日本国内で公共図書館の選書業務に使用される出版情報誌は複数あるが、筆者らは現在の日本国内の公共図書館で最も多く利用されている図書館流通センター（以下、TRC）の『週刊新刊全点案内』（以下、『新刊案内』）を研究対象とする。『新刊案内』は国内の新刊書籍情報を網羅的に掲載することを目指すとともに、書籍のおすすめ度をランク付けする点に特徴がある（1.3節において詳説）。そのため、『新刊案内』の事前選定の有無、および『新刊案内』の意義を明らかにするためには、網羅性とランク付けというこの双方の特性について検討する必要がある。本稿では紙幅の都合上、データにより実証可能であ

る網羅性についてのみ検証を行い、ランク付けについての検証は別稿に譲りたい。

以上より本稿では、図書館外部での事前選定を明らかにする研究の第一段階として、TRCが発行する図書館向け出版情報誌『新刊案内』を対象としてデータ調査を実施し、掲載されている書籍の網羅性の有無や程度を確認することを目的とする。

1. 先行研究と研究の背景知識

1.1 選書論からみた出版流通と図書館の関わり

出版業界と図書館の関わりについては、これまでも様々な議論が行われてきた。たとえば、出版流通業界と図書館の関わりが顕在化した議論の一つとして、いわゆる「無料貸本屋」論争(林 2000)がある。これは図書館がサービスの中心を貸出に置き、より多く貸出される蔵書を求める結果、ベストセラー本など特定の資料購入に偏重する(複本を必要以上に所蔵する)ことで生じる問題である。図書館の貸出サービスの充実が書籍の売上を阻害し、著者や出版社に経済的損害を与えているとの議論がなされてきた(安井 2008)。この議論の背景には選書論が関与している。図書館側の選書の仕方とその結果を関連づけて議論することは出版流通業界と図書館双方にとって意義を持つ。

日本の出版流通市場において、書籍実売総金額に対して公共図書館の図書購入費が占める割合は2.4%(2008年度)であり⁵⁾数値としては小さい。しかし田井(2003)は公共図書館だけでなく、大学図書館など他の館種も含めると「書籍の販売市場における図書館の割合はかなり高く」なり、「図書館による資料購入自体が出版社に利益を与えている」と述べている。また、根本(2004)は、図書館による書籍の購入が出版市場への貢献となり、とりわけ「刷り部数の少ない本については貸し出しが本の市場の侵害に結びつくわけではなく、むしろ図書館と出版流通が相乗的に読者を生み出す面もある」と述べている。これらから図書館の存在が出版流通界に利益を与えているとする意見の存在がうかがえる。また、金額のみでなく出版社の規模や出版物の

内容でみた場合にも図書館の位置づけが変わる可能性がある。

出版流通業と図書館はその関係を一枚岩では捉えられない複雑な利害関係にある。しかしこの問題を図書館側からみた場合、図書館の蔵書が出版流通にどのような影響を与えるのかの議論につながり、蔵書がどのように構成されているかが問題になる。すなわち出版され流通している書籍から図書館の蔵書をどう選ぶかという、選書論の問題を避けて通ることはできない。出版社と図書館双方の利害関係を調和させるために選書の議論を行うことは、双方にとって意義がある。

1.2 先行研究と本研究の位置づけ

図書館と出版流通の関係については多くの先行研究がある。湯浅(2010)はこれまで行われてきた多くの研究をレビューし、図書館と出版流通の関係を整理し評価した。また、蔡(2007)はTRCと中小取次に着目し、TRCに出版社・書店と図書館の媒介的役割を期待すると述べている。

出版流通業界と図書館の関係を論じる先行研究は、図書館を書籍の販売対象と位置づけて論じることが多いとされる(持谷 2001)。出版流通業界から販売対象として図書館にアプローチする方法は各種あるが、尾下(1998)は「カタログ」(出版情報誌)の存在が大きいと指摘している⁶⁾。蔡も前述の論文においてTRCの出版情報誌に触れており、出版情報誌の重要性は現在も大きいことがわかる。

他方、出版情報誌の実態に関する研究はこれまで十分に行われてこなかった。特に出版点数と紙幅の兼ね合い、出版情報誌の対象者などが原因となって、出版情報誌作成時には明示的・暗黙的を問わず「選定」が行われる可能性があるが、これは先行研究でほとんど議論されていない。本稿は先行研究において重要性が指摘されている出版情報誌に着目し、その実態を明らかにしていく点で、図書館と出版流通の关系到新たな知見を見出すものであり、出版学や図書館情報学において一定の意義を持つ。

1.3 図書館流通センターと『週刊新刊全点案内』

本稿で研究対象とした『新刊案内』はTRCが作成している。TRCは

1979年に日本図書館協会整理事業部の業務を継承する形で設立された。設立当初の業務は、書誌データ(のちのMARC)と図書館向けの装備済み書籍⁷⁾の販売が主であった。現在では多くの公共図書館がTRC MARC、『新刊案内』など、TRCの提供する何らかのサービスを利用している。2011年3月31日現在、TRC MARCを採用している日本の公共図書館数は2,898館であり⁸⁾、日本の公共図書館全体で80%以上のシェアを占める。『新刊案内』はTRC MARCをもとに作成されていることから、『新刊案内』も多くの図書館で活用されていることが推察できる⁹⁾。ただし、公共図書館とひとくちにいても、規模や設置地域により選書基準や選書業務に使用するツールの数、種類やその重要度は変化する。選書業務に『新刊案内』以外のツールが使われているかどうかで、『新刊案内』の影響力も変化するだろう¹⁰⁾。筆者らもその可能性は認識しているが、前述のとおり日本の80%以上の公共図書館が何らかの形でTRCのサービスを利用している事実を踏まえると、まず『新刊案内』の実態を検証することに意義があると考えた。

『新刊案内』はTRCから公共図書館に提供される出版情報誌であり、図書館に特化した新刊書籍の書誌情報誌である。『新刊案内』に掲載できるのは新刊書、増補改訂版、新訂版、新装版であり¹¹⁾、掲載される半数以上の書籍に内容紹介と表紙写真が付いている¹²⁾。本誌はTRCと契約(有償)した図書館に毎週送付される。さらに『新刊案内』には「新刊急行ベル」「ストック・ボックス」「新継続」といった図書館専用の在庫・納品システムが連動しており、本誌もこれらにあわせて項目分けがされている。

「新刊急行ベル」は、ベルの対象となっている出版社(以下、対象出版社)¹³⁾から発行された、図書館で人気のある書籍(ベストセラー、利用率が高い・リクエストが多いと思われる本)を受注した図書館へ自動的に納品するシステムである。また、新刊急行ベルでは図書館での利用度が高いと思われる書籍を30のグループに分ける。このうち日本文芸書を扱うグループにはAとBがあり、Aグループのみ出版社(岩波書店、角川書店、河出書房新社、講談社、集英社、小学館、新潮社、中央公論新社、文藝春秋の9社)が指定されている¹⁴⁾。BグループにはAグループ以外の対象出版社から発行された文芸書が振り分けられる。「新刊急行ベル」に指定される書籍は、図書館

や出版関係者を中心に構成される「NPO 図書館の学校」新刊情報委員会の意見をもとに選定されている¹⁵⁾。

「ストック・ブックス」とは、刊行後の一定期間、一定部数を在庫として確保し、図書館からの受注に応じて即時出庫(図書装備を施しても最短1週間)で届けるシステムである¹⁶⁾。『新刊案内』のこの項目で紹介される書籍には、TRCによるおすすめ度のランク付けが3つの星(星なし～☆☆☆)の事実上4つのランク付けで表示される。

「新継続」とは、あらかじめ図書館が定期購読を申し込んだ逐次刊行物・定期刊行物を刊行の都度、各図書館に自動で届けるシステムである。「新継続」に掲載されるものは、「一般全集」「年鑑・白書」など6種類である¹⁷⁾。

さらに『新刊案内』には、これらの他に「単行本・全集」「書評に載った本」「文庫」などの項目があり、各項目に新刊書籍の情報が掲載されている。また、図書館での需要の高い「紙芝居」なども紹介されている¹⁸⁾。

TRCは『新刊案内』を最も網羅的な出版情報誌だと謳っている¹⁹⁾。しかし「最も網羅的」とはTRCの主張であり、また網羅的といわれつつも、掲載されている書籍はTRCにより選定が行われている²⁰⁾。さらに図書館向けの出版情報誌という性質にあわせて、掲載しない書籍のカテゴリが明示されている。『新刊案内』に掲載しない書籍として明示されているものは、「学習参考書」「資格試験問題集」「楽譜(冊子体のもの)」「ポルノグラフィー」「書き込み式等個人利用を目的とするもの」(以下、「書き込み式・個人利用向け」)の5カテゴリである²¹⁾。本研究はこれらの事実に着目し、『新刊案内』に新刊書籍がどの程度網羅的に掲載されているかを検証する。

2. 調査方法

2.1 調査概要と対象

本調査の目的は『新刊案内』とAmazon.co.jp(以下、Amazon)のデータベースを比較し、『新刊案内』の新刊書籍の掲載状況および掲載されていない書籍の傾向を把握することである。

Amazon データベースを採用した理由は次のとおりである。調査にあたり、

国内の出版情報を網羅的に収録したりリストが必要であるが、日本では国内で出版された書籍の情報を完全に網羅した書誌情報誌は存在しない。納本制度をとる国立国会図書館であっても、納本率は9割弱程度であり、網羅的な書誌の作成が困難である²²⁾。現在日本で最も網羅的な書誌として信頼される『日本書籍総目録』にもかなりの漏れがある(木川田・辻 2009)。そこで比較対象の書誌に代わるデータベースとして、オンライン書店の最大手といわれ、収録データ数が『日本書籍総目録』と比べても十分に大きいと考えられる Amazon を採用した²³⁾。

なお調査に用いる『新刊案内』は一般書店では販売されていない。本調査では TRC の協力を得て、2008 年 4 月から 2009 年 3 月までの 12 ヶ月間に発行された『新刊案内』を借りることができた。ただし新刊書籍が『新刊案内』に掲載される時期は不定であり、筆者らが確認した限りでは出版日からおよそ 1 ヶ月後までの間に掲載されることがほとんどであった²⁴⁾。2009 年 3 月発行の書籍は 2009 年 4 月の『新刊案内』に掲載される可能性があるが、今回は 2009 年 4 月の『新刊案内』の提供を受けていないためデータ欠損を招きかねない。よって、手元の『新刊案内』と比較可能な Amazon のデータは 2008 年 4 月 1 日から 2009 年 2 月 28 日までとすることが妥当と判断し、この 11 ヶ月間に発行された書籍を分析対象とした。また、書籍は毎週相当数の新刊が発行されるため、全てのデータを調査することはほぼ不可能である。よって本調査ではデータ収集の期間を上記の 11 ヶ月間に限定した上で、統計的に同等の結果が得られる等間隔抽出法を用いてサンプルを抽出し、標本調査を行った。

2.2 調査手順

まず Amazon データベースから、2008 年 4 月 1 日から 2009 年 2 月 28 日までの 11 ヶ月間に出版された書籍のデータを取得した。データ取得作業期間は 2010 年 12 月 3 日から 12 日の 10 日間である。Amazon データベースでは、商品がブラウズノードと呼ばれる ID を用いてカテゴリ分けされる。これには上位カテゴリとして Books, Classical, DVD などの大カテゴリがあり、さらに Books であれば「文学・評論」「雑誌」などの下位カテゴリに分けて、

商品を細かくカテゴリ分けして扱えるようになっている。

今回取得したのは「Books」(和書)カテゴリの27下位カテゴリの中から、「雑誌」下位カテゴリを除外した26カテゴリである。ただしデータベースの仕様上、ISBNが割り当てられている雑誌は除外されない。ISBNが振られていない商品は比較調査が難しいため、サンプリング前にデータから除外した。このようにデータを取得した結果、全データ数は97,115件であった。さらにこれらのデータを等間隔抽出法により抽出間隔200でサンプリングした。抽出したサンプル数は485件であった。

最後に、抽出したサンプル485件の書籍を『新刊案内』で検索し、掲載されているかを1件ずつ確認した。掲載されていた場合は、『新刊案内』の掲載号数と、掲載項目(新刊急行ベル、ストック・ブックス、新継続など)を確認表に記入した。調査では『新刊案内』の複数の索引から書名索引と出版社索引の2種類を使って検索し、複数回の確認作業を行った。いずれの作業も著者2名で行い、検索に漏れがないよう細心の注意を払った。

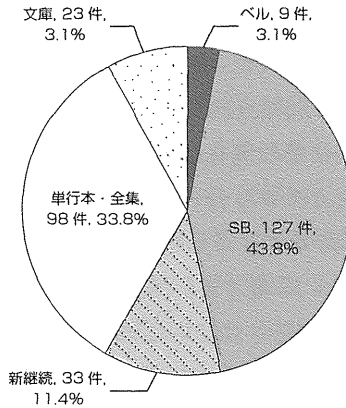
3. 調査結果

本章では『新刊案内』を用いた検索調査の結果について述べる。

3.1 単純集計結果

調査の結果サンプル485件のうち『新刊案内』に掲載されていた書籍は292件(サンプル全体の60.2%)、掲載されていなかった書籍は193件(サンプル全体の39.8%)であった。掲載されていた書籍を項目別にみると、新刊急行ベル(図中ではベルと表記)が9件(掲載書籍全体の3.1%)、ストック・ブックス(図中ではSBと表記)が127件(掲載書籍全体の43.5%)、新継続が33件(掲載書籍全体の11.3%)、単行本・全集が98件(掲載書籍全体の33.6%)、文庫が23件(掲載書籍全体の7.9%)であった。項目別の掲載状況をグラフにしたものが図1である。

図1 項目別掲載状況



3.2 掲載されていない書籍

本調査では、掲載されていないサンプル中193件の書籍が、1.3節で述べたTRCが掲載しないと明示するカテゴリ群のどれに属するかを確認した。TRCが掲載しないと明示している5カテゴリに該当した書籍を抜粋し、表1に示す。

表1 TRCが掲載しないと明示するカテゴリに該当する書籍の例

書籍名	出版社	カテゴリ
くもんの中学基礎がため100%中1理科第2分野編	くもん出版	学習参考書
東京都の論作文・面接 2010年度版(教員試験「過去問」シリーズ)	協同出版	資格試験問題集
新版 技能検定学科試験問題解説集 NO.9 仕上げ	雇用問題研究会	資格試験問題集
フルートで奏でる12のポピュラースタANDARD	中央アート出版社	楽譜
不倫妻東京25時 VOL.1 (オークスマック 67)	オークス	ポルノグラフィ
きらりんレボリューションジグソーパズルブック	小学館	書き込み式・個人利用向け

これら5カテゴリのいずれにも属さない書籍について、Amazonをはじめとする複数のオンライン書店で内容や形態を確認し、各書籍の特徴を文章化した。続いてその文章が似通っているものをグループ分けし、各グループの

特徴によりカテゴリ名を付与した。その結果「複数巻セット販売」「雑誌・ムック」「漫画」「CD・DVD付書籍」「洋書」「既刊書(復刊)」「非掲載理由不明」の7カテゴリが生成された。これらのカテゴリには書籍の内容で分けたものと形態で分けたものが混在する。しかしTRCが非掲載と明示する5カテゴリについてもすでにその混在は見受けられ、条件を統一するために本調査ではあえて混在したカテゴリ分けを採用した。

「複数巻セット販売」にカテゴリ分けしたものは、教育画劇『教育画劇ノンフィクション絵本シリーズ全4巻』など3件がある。これは全集やシリーズものの書籍で1冊ずつ分売されているのではなく、複数冊セットになったものを1冊の本であるようにみなしてAmazonに登録されたものを指す。「非掲載理由不明」とはカテゴリのどれにも当てはまらないものである。

TRCが掲載しないと明示している5カテゴリと、調査で生成された7カテゴリの該当書籍の件数と割合は表2のとおりである。なお、複数のカテゴリに当てはまると考えられる書籍については、TRCが掲載しないと明示しているカテゴリを優先した。したがって、TRCが作成した5カテゴリと排他的かつ網羅的になるよう7カテゴリを筆者らで加えたため、これらの12

表2 掲載されていなかった書籍のカテゴリ分け

カテゴリ	件数	非掲載中の割合	サンプル全体における割合
※学習参考書	29	15.0%	6.0%
※資格試験問題集	23	11.9%	4.7%
※楽譜	12	6.2%	2.5%
※ポルノグラフィー	9	4.7%	1.9%
※書き込み式・個人利用向け	10	5.2%	2.1%
複数巻セット販売	4	2.1%	0.8%
雑誌・ムック	19	9.8%	3.9%
漫画	56	29.0%	11.5%
CD・DVD付書籍	9	4.7%	1.9%
洋書	5	2.6%	1.0%
既刊書(復刊)	1	0.5%	0.2%
非掲載理由不明	16	8.3%	3.3%
合計	193	100.0%	39.8%

(カテゴリの※はTRCが掲載しないと明示しているものを示す)

カテゴリはそれぞれ排他である。

3.3 出版社による掲載状況

本調査で使用したサンプル 485 件の書籍を発行した出版社は合計 307 社である。出版社ごとの平均書籍冊数は約 1.6 件となり、非常に少ない。さらに、出版社により年間の発行冊数に差があり、結果的にサンプルに含まれる書籍数にも差が生じる。当初 307 社全ての掲載割合を検討しようとしたが、結果に誤差が生じるおそれがある。そこで、代表的な出版社として新刊急行ベルの A グループ 9 社の掲載割合をみると、岩波書店 66.7%、河出書房新社 100%、講談社 68.8%、集英社 23.1%、小学館 30.8%、新潮社 50.0%、中央公論新社 100%、文藝春秋 100%、角川書店²⁵⁾ 75.0% であった。この結果を表 3 に示す。

表 3 新刊急行ベル A グループ出版社の掲載割合

出版社名	抽出件数	掲載あり(件)	掲載なし(件)	掲載割合
岩波書店	3	2	1	66.7%
河出書房新社	4	4	0	100.0%
講談社	16	11	5	68.8%
集英社	13	3	10	23.1%
小学館	13	4	9	30.8%
新潮社	6	3	3	50.0%
中央公論新社	1	1	0	100.0%
文藝春秋	5	5	0	100.0%
角川書店	4	3	1	75.0%

4. 考察

TRC は『新刊案内』について、新刊書籍を網羅的に掲載した出版情報誌であると謳っているため、調査目的を達成するには、掲載されている書籍よりも掲載されていない書籍の特徴を分析することに意義があると筆者らは考

える。そこでまず『新刊案内』に掲載されていない書籍が掲載されていない理由を考察する。さらに掲載状況や扱われ方が特徴的であるジャンルについて詳細な検討を加える。それらの考察をもとに出版社ごとの掲載状況を分析する。

掲載されていない個々の書籍からジャンル、そして出版社へと分析の単位を拡大することで様々なレベルから『新刊案内』を捉え、その掲載にTRCの基準に合致する、合理的理由が存在するか確認できると考えた。この合理的理由の存在を、本稿では必要に応じて「整合性」と表現する。序文で述べたように本稿は『新刊案内』の網羅性の検証が目的であるため、その基準自体の価値や妥当性の評価は行わず、あくまで整合性の有無の検証に留める。

4.1 サンプルングの妥当性

『新刊案内』は新刊急行ベル、ストック・ブックスなどに項目分けされているが、『新刊案内』全体に占める各項目の割合と、サンプルング後の書籍における各項目の割合を比較することでサンプルングの妥当性を検討する。

2008年4月から2009年2月までの『新刊案内』に収録された書籍を項目別にみると、新刊急行ベルが全体の3.4%(2,100件)、ストック・ブックスが全体の38.3%(23,306件)、新継続が全体の11.9%(7,242件)、その他(単行本・全集、文庫など)が全体の46.4%(28,279件)であった²⁶⁾。これは3.1節で確認したサンプルング後のデータの割合とほぼ同じである。以上から、本調査のデータのサンプルングは妥当といえる。

4.2 掲載されていなかった書籍についての考察

本節では、データ調査により『新刊案内』に掲載されていなかった書籍193件について、その理由を分析する。

まず『新刊案内』が掲載しないと明示している書籍について確認する。3.2節で述べたように『新刊案内』は「学習参考書」「資格試験問題集」「楽譜(冊子体のもの)」「ポルノグラフィ」「書き込み式・個人利用向け」を非掲載としている。本調査でこれらに該当する書籍は83件あり、掲載されていなかった書籍の43.0%である。これらは、『新刊案内』で掲載しないことが明

示されているため、掲載されていないことに整合性がある。なお「ポルノグラフィ」については4.3節でさらに検討する。

次に『新刊案内』が掲載しない書籍として明示していないものの、調査では掲載されていなかった書籍について確認する。表2で※印が付いているものはTRCが『新刊案内』には掲載しないと明示するカテゴリであるが、掲載されていない書籍の中にはそれ以外に「複数巻セット販売」「雑誌・ムック」「漫画」「CD・DVD付書籍」「洋書」「既刊書(復刊)」などが該当した。

これらについては、データ調査のサンプリング過程で生じた技術的問題を確認した上で分析を進める。本調査はAmazonデータベースを出版データとして利用したが、データベースの仕様上、取得したデータの中に雑誌やムック、洋書と思われる書籍も多く混入していた。TRCは雑誌と洋書についてもMARCは作成しているが、これらのデータは『新刊案内』のような出版情報誌の形では提供されていない。『新刊案内』はTRCが「新刊図書の情報が発売と同時に掲載する書誌情報誌」と謳っていることから、雑誌やISBNの付いていないムックが非掲載となっていることには整合性がある。本調査でこれらに該当する書籍は24件あり、掲載されていなかった書籍の12.4%を占めた。

また、「既刊書(復刊)」にカテゴリ分けした書籍は、Amazonデータベース上は2008年出版となっていたが、他のデータベース(NACSIS Webcat)では1997年出版となっていた。この書籍について出版社に問い合わせたところ、2008年版は1997年版の復刊であり、内容やISBNは同一であるとの回答が得られた。よって『新刊案内』では既刊本扱いとされることが考えられ、非掲載になることには整合性がある。

以上3通り(TRCが明言しているカテゴリ、データベース仕様の問題、復刊)の分析により、掲載されていなかった書籍の5割以上について整合性が確認できた。

整合性が明確に確認できないものは、表2で「複数巻セット販売」「CD・DVD付書籍」「非掲載理由不明」「漫画」に分類した書籍である。これらは次のように考える。

「複数巻セット販売」とは、3.2節で説明したとおり、1巻ずつISBNが割

り振られるものと別に、複数巻の合冊として ISBN が割り振られている書籍である。Amazon のデータベースでは ISBN の違いにより、各巻と複数巻セットは別書籍として識別される。しかし実際は同じ書籍であるため、『新刊案内』では各巻別々に掲載され、セットでの掲載を行わないと予想される。この点については、今後 TRC への聞き取り調査などにより詳細を明らかにしたい。

「漫画」については、TRC データ部が公開している「TRC データ部ログ」に「週刊新刊全点案内では、通常コミックはご紹介していません」と記載されている²⁷⁾。そのため今回の分析では『新刊案内』にコミックが掲載されていないことに整合性があるとみなす。しかし、この「通常」という概念は曖昧である。さらに、『新刊案内』では掲載書籍に「漫画」というジャンルが設けられていて、掲載されている漫画と掲載されていない漫画があり、整合性が十分には確認できない。また、「TRC データ部ログ」は TRC の公式ブログなので信頼できる情報と考えられるものの、『新刊案内』の紹介文などに漫画の掲載について公式に明記されている箇所は見受けられなかった。これについては、4.4 節でさらに検討する。

掲載されていなかった「CD・DVD 付書籍」をみると「ポルノグラフィー」に類するものや写真集、アイドル DVD に類すると思われるものもあった。これらは前掲の「ポルノグラフィー」に該当すると考えれば、非掲載であることに整合性がある。しかし「ポルノグラフィー」以外のものは、オーディオブック、スポーツ教習 DVD、語学番組の教材などがあげられ、これらは『新刊案内』に掲載されているものとされていないもの双方が混在し、掲載基準が明確でない。CD・DVD 付書籍は、図書館にとって扱いが難しい資料である。付属の CD や DVD は著作権の扱いが難しく、資料により貸出の可否が異なる。『新刊案内』に掲載されている一部の CD・DVD 付書籍については出版社から TRC に情報が伝達され、貸出の可否が『新刊案内』に明記されるものもあるが、実際にはその区別が出版社によって明確にされていないものも多い。さらに、一部の CD・DVD は、書籍としての実態が希薄であるのに、出版流通ルートに販路を確保するためあえて ISBN を取得している場合もある。この場合、データベース上の情報だけをみれば書籍だが、実

態は書籍とはかけ離れた資料となり、図書館で「書籍」として扱うことは難しい。こうした事情から、CD・DVD付書籍の非掲載が多いと推察される。

以上の分析から、『新刊案内』に掲載されていない書籍のほとんどが、非掲載であることに合理的な理由があることが確認できた。最後に、表4に示した非掲載理由が不明な書籍16件について考える。これらが非掲載である理由として考えられることは「同人誌」「自費出版による出版物」「地方出版社による出版物」である。

表4 「非掲載理由不明」にカテゴリ分けした書籍名および出版社

書籍名	出版社
記録9号	Akio Nagasawa Publishing
nu 03	Ricochet
Look Now	UTRECHT
社員の心を温める会社は必ず伸びる：30分で分かる人材経営	イマジナ
旅に出る！ヴァガボンディング・ブック	ヴィレッジブックス
生きててよかった：膠原病とともに	エピック
大正期の家庭生活	クレス出版
学校コンサルテーションケースブック：実践事例から学ぶ (学校コンサルテーションブック)	ジアース教育新社
プライダルフェア	ピーエービージャパン
Mac OS X Server Essentials 第2版：Mac OS X Server 10.5, 運用とサポートのためのガイド（アップルトレーニングシ リーズ）	ボーンデジタル
南河内今昔写真帖 保存版：富田林市・河内長野市・大阪狭山 市・太子町・河内町・千早赤阪村	郷土出版社
ハバリ！ピンキー先生、女ひとりアフリカへ：ケニアでのミ ニストーリー体験記	文芸社
思い出のページから：誰も無意味に生まれたのではない	文芸社
幸せを運ぶスピーチ術50のポイント：人生がもっと楽しくな る！	文芸社
かにさんありがとう	文芸社ビジュアルアート
子どもと健康：今、イキイキとした「性教育」を	労働教育センター

まず「同人誌」である可能性について検討する。「同人誌」は出版社ではなく個人や同人サークルにより（多くの場合は趣味として）製作される書籍

であり、即売会や同人誌取扱店舗でのみ入手できる形態をとることがほとんどである。しかし一部の同人サークルでは流通経路確保のため ISBN を取得し、Amazon に申請することで同人誌を販売する例が見受けられる²⁸⁾。このような書籍は一般的な出版流通ルートをとらないため図書館が扱うことは少なく、非掲載に合理的な理由があると考えられる。本調査でサンプリングしたデータでも、Web 上の情報から同人誌と思われる書籍が複数件存在した。ただしこれらが同人誌である確証を書誌情報だけで得ることは困難で、データ調査をもって掲載されていないことの是非は問えない。

次に「自費出版による出版物」の可能性を検討する。自費出版は個人で出版する場合に加えて、自費出版を専門に行う出版社から出版される場合もある。表 4 では文芸社から発行された書籍がみられるが、文芸社は自費出版を扱う出版社である。しかし同人誌と同様、これらが自費出版である確証は書誌情報だけでは得ることが困難で、掲載されていないことの是非は問えない。

最後に「地方出版社による出版物」について検討する。日本の出版社はその 7 割以上が東京に集中しており、地方所在の出版社は少数である²⁹⁾。表 4 中で地方出版社と考えられるのは郷土出版社(所在地:長野県)であった。『新刊案内』の出版社別索引を確認したところ、本調査のサンプルには含まれなかったが、この出版社が発行した書籍が掲載されていることが確認できた。このことから、地方出版社であるとの理由だけで書籍が掲載されない状況はないと考えられる。

以上より、「非掲載理由不明」にカテゴリ分けした書籍 16 件については追調査の余地があるものの、それ以外の書籍 469 件(サンプル全体の 96.7%)については、掲載されるかどうかの基準に対する整合性が確認できた。

4.3 ポルノグラフィーの扱い

前節では『新刊案内』に掲載されていない書籍を分析した。本節および次節では、これらから、いくつかのジャンルに着目してさらに分析を行う。

まず「ポルノグラフィー」に着目する。3.2 節で述べたように、掲載されていなかった書籍の中でこのカテゴリに分類したものは 9 件であった。ポルノグラフィーの辞書上の定義は「一般に、性的行為のリアルな描写を主眼と

する文学、映画、写真、絵画などの総称」であるが、ポルノグラフィーとそれ以外を分ける「絶対的な基準はない」³⁰⁾。そのような状況を踏まえ、『新刊案内』に掲載されていた書籍群にも「ポルノグラフィー」と認識されうる書籍があったことに注目する。

たとえば、『新刊案内』に掲載されていた書籍の中には、いわゆる「ボーイズラブ(BL)」と呼ばれるジャンルの小説が複数存在した。ボーイズラブとは「やおい」とも呼ばれ、男性の同性愛を題材とした小説や漫画のジャンルを指す和製英語であり、性的な描写も多い。辞書上の定義で判断するならば、ボーイズラブ小説も「ポルノグラフィー」に該当すると考えられる。

しかし守(2010)によると、こういった男性同性愛の表現は、純粋な愛を追求するものから性行為シーンをきっちりと描くものまで内容は様々だという³¹⁾。内容がハードなものはポルノグラフィーと認識されうるが、男性向けポルノグラフィーとは異なり、女性向けポルノグラフィーはどれがポルノグラフィーなのか、傍目にも理解するのが非常に難しい特徴を持つとされる³²⁾。つまり単純に「ボーイズラブ小説=ポルノグラフィー」との判断はできず、結果的に『新刊案内』に非掲載となる整合性がないと判断されたと推察される。そのような中で、2008年には大阪府の堺市立図書館で所蔵しているボーイズラブ小説に対して住民から苦情が来るという問題が発生している³³⁾。TRCによるポルノグラフィーの定義の認識や今後の対応については、聞き取り調査などで把握していく必要がある。

4.4 漫画の扱い

次に着目したものは「漫画」である。3.2節で述べたように、掲載されていなかった書籍の中で「漫画」にカテゴリ分けしたものは56件であった。この56件の「漫画」をさらに分類すると、「少年チャンピオン・コミックス」「りぼんマスコットコミックス」などの漫画レーベルと、「秋田文庫」「集英社文庫コミック版」などの漫画文庫に大別された。

掲載されていなかった漫画は56件であり、掲載されていない書籍の29.0%、サンプル全体の11.5%である。このことから比較的多くの漫画が掲載されていないことがわかる。4.2節でも述べたが、「TRC データ部ログ」

に「コミックは通常紹介していない」と記載されているため、漫画レーベルおよび漫画文庫をコミックと捉えるのならば、掲載されないことに整合性がある。

しかしTRCは『新刊案内』において「漫画」を掲載しないと明言しておらず、むしろ出版情報誌内で掲載書籍のジャンルの一つとして「漫画」を設定している³⁴⁾。掲載されていた書籍の中にも、『マンガでわかる生化学』といった、漫画で表現された書籍が存在した。『新刊案内』には明確な「漫画」の定義は記載されていない。基準は様々³⁵⁾だが、公共図書館の中にも漫画の収集・貸出を行う館³⁶⁾があり、図書館資料の中の漫画の位置づけや重要性も変化している。「漫画」をどう定義し、どういった「漫画」を掲載し、どういった「漫画」を掲載しないかについても、今後聞き取り調査などで明らかにしたい。

4.5 出版社による掲載状況

本節では出版社による掲載状況の結果をもとに、出版社ごとの掲載状況进行分析する。ただし3.3節で述べたように出版社ごとのサンプルが非常に少ないため、今回は新刊急行ベルAグループの出版社9社を例に分析する。

まずAグループの中で掲載割合が低い集英社と小学館について確認する。この2社は実用書や文芸書だけでなく、漫画や幼児向け書籍も数多く手がける出版社である。本調査で掲載されていなかった2社の書籍を確認したところ、集英社では掲載されていなかった10件全てが調査において「漫画」にカテゴリ分けしたものであり、小学館では掲載されていなかった9件中1件が「書き込み式・個人利用向け」、8件が「漫画」にカテゴリ分けしたものであった。その他の出版社についても、掲載されていない書籍は「CD付き書籍」(新潮社『グスコブドリの伝記(新潮CD)』)などや「既刊書(復刊)」(岩波書店『ソクラテス以前哲学者断片集〈第2分冊〉』)などといったカテゴリに分けられ、いずれも整合性が検証された。

この結果から、出版社による掲載状況に大きな違いはないことが推察される。以上の考察から、『新刊案内』は「図書館に特化した新刊図書」という制限はあるものの、非常に網羅性のある掲載状況となっていると考えられる。

おわりに

本稿では TRC『新刊案内』の特性の一つである網羅性について、新刊書籍の掲載状況を標本調査で検証した。Amazon データベースとの比較の結果、『新刊案内』における新刊書籍の掲載割合は 60.2% だったが、掲載されていない書籍(サンプル全体の 39.8%)についても、TRC が掲載しないと明示しているものや、複数巻セット販売、CD・DVD 付などの形態から掲載されていない合理的な理由がうかがえるもの、あるいは調査で用いたデータベースの仕様によるノイズの混入などが含まれていた。そのためサンプルとして抽出された書籍 485 件のうち、最終的には掲載されない理由が不明である 16 件を除いた 469 件(96.7%)について、掲載・非掲載の明示的ないしは暗黙的な基準との整合性を確認できた。この結果から『新刊案内』は「図書館に特化した新刊情報」という点からみると、網羅性が高く偏りが少ない出版情報誌であるといえる。

しかし、4 章で述べたように「ポルノグラフィ」や「漫画」の定義が明示されていない点、掲載されない理由が不明である書籍が存在する点については留意する必要がある。TRC は図書館の選書サポートを行う企業として、出版情報誌に掲載する書籍、しない書籍を明示するだけでなく、その定義も出版流通業界や図書館に示す責任があると筆者らは考える。また、図書館はこうした特性を把握した上で、『新刊案内』を選書業務に活用することが求められる。

今後の課題として、本稿では取り上げなかった『新刊案内』での書籍のランク付けやその上位のランクへの選定方法、また、TRC 以外の民間 MARC 販売会社が発行する出版情報誌の掲載状況や選定方法などに対する調査があげられる。さらなる調査を通して、出版情報誌の特性や制作する側の選定の実態・意図を明らかにすることが必要である。それにより、序文で述べた出版情報誌の事前選定の有無や出版情報誌の意義について、より深い検討ができると期待される。

[謝辞]

調査に応じていただき『週刊新刊全点案内』をご提供いただいた(株)図書館流通センターの皆様、出版業界に関して多大なるご助言をくださった黒古一夫先生に心から感謝いたします。

注

- 1) 選書を含む蔵書構成の研究動向については、安井(2010)が参考になる。
- 2) 本稿では図書館の外側で行われている広い意味での書籍の選択を「選定」とする。
- 3) MARC: machine readable catalog. 書誌記述、標目、所在記号などの目録記入に記載される情報を、一定のフォーマットにより、コンピュータで処理できるような媒体に記録すること、または記録したもの。(『日本目録規則1987年度版改訂3版』用語解説)
- 4) たとえば、TRCが発行する『新刊案内』や、日本出版販売株式会社が発行する「ウィークリー出版情報」、株式会社トーハンが発行する「トーハン週報」などがある。
- 5) 出版ニュース社『出版年鑑2011』2008年度書籍実売総金額および、日本図書館協会ウェブサイト「日本の図書館統計」(<http://www.jla.or.jp/library/statistics/tabid/94/Default.aspx>)2008年度決算額のうち図書費のデータから算出した(2012-01-27参照)。
- 6) 尾下(1998) pp.51-61.
- 7) たとえばブックカバー(保護フィルム)をかける、請求記号ラベルの貼付など。
- 8) 株式会社図書館流通センター。“沿革 | 会社概要”. 株式会社図書館流通センター。(オンライン), <http://www.trc.co.jp/company/enkaku.html>. (2012-01-27参照)。
- 9) 第一著者が2008年に行った聞き取り調査では、群馬県内の公共図書館37館のうち出版情報誌から選書すると回答した館が33館、そのうち『新刊案内』を使用している館は30館であった。つまり群馬県内の89%の公共図書館が『新刊案内』を選書業務に採用していることになる。
- 10) 注9で述べた調査では、『新刊案内』と他の書店のオンラインサービスを併用している図書館や、『新刊案内』を使用せず、出版社の新刊情報などから購入図書リストを作成し、選書している図書館などもみられた。
- 11) 尾下(1998) p.60.
- 12) 「新刊急行ベル」「新継続」「ストック・ブックス」などTRC在庫商品は、表紙写真が掲載されているが、「単行本・全集」など表紙写真が掲載されていない項目もある。
- 13) TRCのWebサイトに掲載されている「2010年新刊急行ベルのご案内」には、ベルの対象となっている出版社が記載されている。(株式会社図書館流通センター。“2010年度新刊急行ベルのご案内”. TRC株式会社図書館流通センター。(オンライン), http://www.trc.co.jp/library/support/image/bell_2010.pdf, (2012-01-27参照)。
- 14) 毎号の『新刊案内』に掲載されている「新刊急行ベル」の解説に基づく。
- 15) 株式会社図書館流通センター。“2010年度新刊急行ベルのご案内”. TRC株式会社図書館流通センター。(オンライン), http://www.trc.co.jp/library/support/image/bell_2010.

- pdf. (2012-01-27 参照).
- 16) 株式会社図書館流通センター. “新刊急行ベル | 図書館資料のご購入サポート | 図書館の皆さま”. 株式会社図書館流通センター. (オンライン), <http://www.trc.co.jp/library/support/bell.html>, (2012-01-27 参照).
 - 17) 株式会社図書館流通センター. “[シリーズ・定期刊行図書] 自動納品システム「新継続」のご案内”. TRC 株式会社図書館流通センター. (オンライン), http://www.trc.co.jp/library/support/image/shinkeizoku_2010.pdf, (2012-01-27 参照).
 - 18) 株式会社図書館流通センター. “週刊新刊全点案内 | 図書館資料のご購入サポート | 図書館の皆さま”. 株式会社図書館流通センター. (オンライン), <http://www.trc.co.jp/library/support/guide.html>, (2012-01-27 参照).
 - 19) 2009 年 11 月の図書館総合展におけるフォーラムでも「週刊新刊全点案内は日本で最も網羅的な出版情報」との説明がされ, さらに TRC の代表取締役の石井も「網羅性は非常に高いはず」と別の機会にインタビューで述べている. (石井昭・堀渡・沢辺均「TRC・図書館流通センターはなにを考えているのか: [インタビュー] 図書館をサポートする仕事」『ず・ぼん』(11), pp.16-39, 2005)
 - 20) 『新刊案内』内に「新刊急行ベル」へ掲載する書籍の選定は「NPO 図書館の学校」に委嘱していることが明記されている. また, 2009 年 11 月の図書館総合展におけるフォーラムにおいて TRC 社員に対し『新刊案内』へ掲載する書籍の選定方法を聞く質問があった際, 「分類ごとに社員でチームを組んで選んでいる」という回答がなされている.
 - 21) 毎号の『新刊案内』冒頭に掲載されている「週刊新刊全点案内の見かた・使いかた」の記述に基づく.
 - 22) 国立国会図書館. “納本される出版物とその納入率”. 2008-09-22. (オンライン), http://www.ndl.go.jp/jp/service/event/pdf/nouhon_slide_01.pdf, (2012-01-27 参照).
 - 23) Amazon をはじめとする Web 上のデータベースを使うことは, 図書館情報学の研究などに多くみられる手法である. 同様の手法を用いた先行研究の例として, 大場ら (2010) や木川田・辻 (2009) がある.
 - 24) 予備調査として, 2008 年 4 月から 6 月に出版された書籍が掲載されている『新刊案内』の号数を確認したところ, いずれも出版後 1 ヶ月以内に掲載されていた. この結果より, 本調査でも出版日からおよそ 1 ヶ月後までの間に掲載されると考えた. なお, 1 ヶ月後までの『新刊案内』に掲載されていなかった書籍は調査範囲を 3 ヶ月先まで拡大することで, 調査による漏れを防止した.
 - 25) 現在, 角川書店の書籍は「株式会社角川書店」が発行, 「株式会社角川グループパブリッシング」が発売を担っている. そのため, 『新刊案内』で出版社が「角川書店」と表記されている書籍が, Amazon のデータベースでは「角川グループパブリッシング」と表記されている.
 - 26) 『新刊案内』1610 号に掲載された統計データより.
 - 27) TRC データ部ログ. “コミックが出世する?”. TRC データ部. 2009-03-09. (オンラ

- イン), <http://datablog.trc.co.jp/2009/03/09182357.html>, (2012-01-27 参照).
- 28) 「Amazon e 託販売サービス」を利用すれば、個人や同人サークルが商品を Amazon 上で販売することが可能である。 <http://advantage.amazon.co.jp/gp/vendor/public/join/>
- 29) 出版ニュース社『出版年鑑 2011』の「都道府県別出版社並びに小売店数」のデータより算出した。
- 30) 平凡社『世界大百科事典』改訂新版, 26 巻, pp.460-461, 2007 による。
- 31) 守(2010) p.74
- 32) 守(2010) p.76
- 33) 「悩ましい「ボーイズラブ」: 界の図書館 小説 5500 冊」朝日新聞 2008 年 11 月 5 日朝刊 31 面。
- 34) 掲載資料の項目解説において、漫画の部分には「漫画でかかれた図書。分類 726.1 に限らない(「まんがで〜」とあっても文章主体の図書には適用しない)」と記載されている。
- 35) 注 9 で述べた聞き取り調査で、漫画の選書については「作者を限定して収集する(手塚治虫やあだち充など)」図書館がある一方で、多彩なレーベルの漫画(コミックス)を収集している図書館もあった。
- 36) 漫画の所蔵・貸出を行う代表的な図書館として、滋賀県の長浜市立高月図書館(旧・高月町立図書館)があげられる(三宅 2003)。

引用・参考文献

- 大場博幸・安形輝・池内淳・大谷康晴「図書館はどのような本を所蔵しているか: 2006 年上半期総刊行書籍を対象とした包括的所蔵調査」『第 58 回日本図書館情報学会研究大会要綱』 pp.77-80, 2010
- 尾下千秋『変わる出版流通と図書館』日本エディタースクール出版部, 1998
- 河井弘志『図書選択論の視界』日本図書館協会, 2009
- 木川田朱美・辻慶太「国立国会図書館におけるボルノグラフィの納本状況」『図書館界』61(4), pp.234-244, 2009
- 田井郁久雄「「貸出」は図書館も出版文化も発展させる」『図書館界』54(6), pp.260-271, 2003
- 蔡星慧「図書館サービスと出版流通の課題: 図書館流通は変わってきたのか」『現代の図書館』45(1), pp.3-10, 2007
- 根本彰『続・情報基盤としての図書館』勁草書房, 2004
- 林望「図書館は「無料貸本屋」か」『文藝春秋』2000 年 12 月号, pp.294-302, 2000
- 三宅正記「高月町立図書館のマンガの貸出し: 入手から選書まで」『みんなの図書館』(310), pp.19-28, 2003
- 持寿寿夫「出版社からみた図書館」『現代の図書館』39(4), pp.236-241, 2001
- 守如子『女はポルノを読む: 女性の性欲とフェミニズム』青弓社, 2010
- 安井一徳『図書館は本をどう選ぶか』勁草書房, 2006

安井一徳「[「無料貸本屋」論] 田村俊作・小川俊彦編『公共図書館の論点整理』勁草書房,
pp.1-34, 2008

安井一徳「蔵書構成」『カレントアウェアネス』306, CA1734, pp.16-22, 2010

湯浅俊彦「出版流通と図書館：21世紀最初の10年間」『図書館界』62(5), pp.517-527, 2010